オンライン学習を活用したアクティブ・ラーニング型の授業づくり

東京理科大学　教育支援機構　教職教育センター　准教授　大浦（おおうら）　弘樹（ひろき）

2020年頃から拡大した新型コロナウイルス感染症（コロナ感染症）によって、学校ではインターネットを介して授業を行う「オンライン授業」が広く知られるようになりました。Zoomなどのオンライン会議サービスを活用して、教師が教室のパソコンから自宅の生徒たちにホームルームや授業を行っている様子をニュースで見た方も多いのではないでしょうか。コロナ禍をきっかけに初等中等教育では「GIGAスクール構想」が急ピッチで進められ、自治体によって進度は異なるものの、各学校に1人1台のコンピュータ端末（パソコン）や高速インターネット環境が整備されつつあります。一方で、従来の教室授業に戻りつつある昨今、導入したパソコンが活用されずに棚にしまわれたままという学校もあるのではないでしょうか。

そこで、今回は「オンライン学習を活用したアクティブ・ラーニング型の授業づくり」というテーマで、オンライン授業や教室授業にオンライン学習を組み合わせる授業形態を挙げ、新しい学習指導要領が示す「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業づくりのヒントについてご紹介したいと思います。

〈オンライン授業〉

オンライン授業は、生徒が教室以外の自宅等からインターネットを介して遠隔で授業に参加する形態で、大きく「同期型」と「非同期型」の2つに分類されます。「同期型」は、前述のオンライン会議サービスなどを使って教師と生徒がオンライン上でリアルタイムに授業に参加する形態を指します。一方の「非同期型」は、講義の資料や課題などのオンライン教材に生徒が自宅等からアクセスして各自のペースで学習する形態を指します。

また、この同期型・非同期型のオンライン授業（学習）を教室授業に組み合わせる形態もあり、代表的なものとしてハイブリッド型授業／ハイフレックス型授業や、ブレンド型授業があります。厳密にはそれぞれの定義に重複する部分があるのですが、基本的には以下のように整理することができます。

〈ハイブリッド型／ハイフレックス型授業〉

ハイブリッド型授業は、同じ授業に教室（対面）で参加する生徒と、オンラインで参加する生徒が混在する授業形態を指します。例えば、教師が教室でオンライン会議サービスにつなぎながら授業を行うことで、教室とオンラインで参加する生徒に対して同時に授業を行えます。コロナ禍の非常事態宣言時に、教室内で学生間に十分な距離を保つために、学籍番号が奇数か偶数かで教室かオンラインで出席する番を回す形態がその1つです。または、教室で実験するグループと自宅で非同期でオンライン学習するグループを半分半分で回しながら授業を進めるような分散登校も当てはまります。

ハイブリッド型授業のうち、生徒の都合で自由に参加する場所を選べるのがハイフレックス型授業です。ハイフレックス（HyFlex）の語源はHybrid-Flexibleで、ハイブリッドかつ柔軟であるという意味です。例えば、家族がコロナ感染症のために自宅待機となった場合や、公共交通機関に大幅な遅延が発生した場合でも、オンライン参加に切り替えることができれば欠席せずに授業に出席できます。これらの授業形態は、授業の実施や出席に関わる利便性が高く、非常時への対応がしやすくなる点で有用な授業形態です。

〈ブレンド型授業〉

ブレンド型授業は、教室授業の前後に予習・復習として非同期型のオンライン学習を組み合わせる、あるいは今週は教室授業を行い来週は非同期のオンライン学習を行うなど、教室授業にオンライン学習を組み合わせる形態を指します。特に、毎回の授業で教室授業とオンライン学習を組み合わせるブレンド型授業は、授業時間外の時間を授業設計の一部に組み込むことができ、従来の教室のみで授業を行うよりも学習効果が高まることが先行研究の蓄積で示されています。

初等中等教育においては、このブレンド型授業の一形態として「反転授業」が知られています。反転授業

とは、教師が授業で行う説明（講義）部分を動画で提供し、生徒は授業前に自宅等で視聴して学習を行い、授業ではグループワークや演習・実習など、生徒が協働的に取り組む学習活動を中心に行う形態です。従来の教室授業で授業時間の大半を占める説明部分を授業時間の外（前）に動かすことで、授業時間の大半を生徒が課題に取り組む、自身の考えや意見を発言する、他者と教え合い／話し合いをするといった学習活動に十分な時間を割くことができるようになります。

〈オンライン学習を活用して主体的・対話的で深い学びに導く授業を設計する〉

このように、教室授業にオンライン学習を組み込むことで、新しい学習指導要領で求められている「主体的・対話的で深い学び（アクティブ・ラーニング）」の実現に向けた授業づくりがしやすくなります。アクティブ・ラーニングが難しい理由の１つとして授業運営のハードルが上がることが挙げられます。例えば、生徒がグループで話し始めると収拾がつかなくなり計画していた時間配分で授業を進められない、あるいはそうなるのではないかと不安であるという話をよく聞きます。今回の学習指導要領の改訂では学習内容は特に削減されていませんので、多くの教師にとって時間管理がより厳しく感じるのは無理もありません。反転授業をはじめとしたブレンド型授業を導入することで、授業時間内でアクティブ・ラーニングにつながる学習活動に充てる時間が確保しやすくなるわけです。

また、令和の日本型学校教育として掲げられている「個別最適な学び」の視点でもオンライン学習が活用できます。個別最適な学びには「指導の個別化」と「学習の個性化」の２つの軸がありますが、前者であれば例えば単元でつまづきやすいポイントごとにオンライン教材を準備しておき、各自で必要な教材を選んで学習してもらい、足りない部分があれば学校で個別に指導することができます。ただし、個別最適な学びは「協働的な学び」とセットで考える必要があるので、授業時間に各自が選んで学習してきた教材について生徒同士で説明し合うなど、教室での協働的な学習活動とセットで授業を設計することが肝要です。

〈アクティブ・ラーニングに必要な２つの認知過程〉

これまで教室授業にオンライン学習を組み合わせるブレンド型授業について整理してきましたが、ブレンド型授業で最も重要なのは、教室で生徒が他の生徒と主体的に取り組める協働的な学習活動の設計です。インターネットで「アクティブ・ラーニング」で検索すると、アクティブ・ラーニングの定義や、ラウンド・ロビンや、ディベートといったグループワークの型や技が数多く出てきます。しかし、アクティブ・ラーニングを実現する上で何が大事であるかを問うと「生徒同士で一緒に課題に取り組ませる、話し合わせる」といった、目に見えやすい部分の答えしか返ってこないことも少なくありません。しかし、それらはアクティブ・ラーニングという目的のための手段であり、目的そのものではありません。そして、その目的は“目に見えにくい”生徒一人一人の頭の中（認知）にあります。今回はその目的の一部である「自己説明」と「内省」の２つをご紹介したいと思います。

「自己説明」とは、自身が知っていること、考えていることを“自身の言葉で”説明しようとすることです。これまで、人に何かを聞かれて答えようとしたり、人に何かを説明しようとしたりする時に「えーと」「なんだっけ」と言葉に詰まったことはないでしょうか。その時、頭の中では自己説明が起こっているはずです。自己説明が起きると、自分が分かっている部分、分かっていない部分の気づきが促されます。生徒の頭の中で自己説明を起こすためには、各自がまず１人で自身の考えを言葉にするステップと、互いに自身の考えを言葉で説明し合うステップを明示的に設けるのがポイントです。他者に説明するという活動の目的が自己説明の動機づけにつながります。

次に、自身の考えに他者の考えを組み込んで自身の“深い学び”に導くのが「内省（リフレクション）」です。内省は生徒同士で話し合う中で、あるいはその後で他者の説明を組み込んで自身の理解や考えを更新する過程で起きます。この内省が頭の中で起きなければ、グループワークによる深い学びは期待できません。内省を起こすためには、話し合いの後または宿題として、自身と他者の考えの違いを説明する、自身の説明を更新するといったステップを明示的に設けるのがポイントです。筆者は「グループワークは個人ワークで挟む」という原則に沿って、自己説明と内省を促す授業づくりを心がけています。

本記事の内容が主体的・対話的で深い学びに向けた授業づくりに、少しでも参考となれば幸いです。